論　文 ニダバ (*Nidaba*) 45(2016), 79-88

日本語「象は鼻が長い」構文とインドネシア語"Gajah belalainya panjang"構文について

Tiwuk Ikhtiari

1. はじめに

日本語の「は」と「が」の用法の区別は、特に母国語にそのような標示がない日本語学習者にとって容易なものではない。本稿は、これら二つの助詞が同時に現れる文として日本語の「象は鼻が長い」構文を取り上げ、この構文と意味的に対応するインドネシア語の"Gajah belalainya panjang."構文を対照することにより、それぞれの構文の特徴を明らかにすることを目指している。

まず、日本語の「は」と「が」二つの助詞が何を示すのかを上述の「象は鼻が長い」構文において明らかにし、さらにインドネシア語の"Gajah belalainya panjang."構文について意味的および統語的観点から考察を加えたいと思う。

2.「象は鼻が長い」構文について

日本語の「は」「が」について、久野(1973)は、「は」には二つ、「が」には三つの異なった用法があると述べている。「は」の用法は次のようになる。(例文は久野(1973:27-35)から引用されたものである。)

① 《主題》を表す:「太郎は学生です。」

② 《対照》を表す:「雨は降っていますが、雪は降っていません。」

一方、「が」の用法は、下記の三つである。

① 《総記》を表す:「太郎が学生です。」(「今話題になっている人物の中では太郎だけが学生です」の意味)

② 《中立叙述》を表す:「雨が降っています。」、「おや、太郎が来ました。」

③ 《目的格》を表す:「僕は花子が好きだ。」

《主題》となり得るのは既に会話に登場した人物・事柄、すなわち、現在の会話の登場人物・事物リストに登録済みのものを指す名詞句である。

《中立叙述》の「が」は、述部が動作を表すか (1)、存在を表すか (2)、一時的な状態を表すか(3)の場合に限られる。

(1) 太郎が見舞いに来てくれた。

(2) 机の上に本がある。

(3) 空が青いね。

《総記》の「が」の場合は、述部が恒常的状態 (4)、習慣的動作 (5)を表す。

(4) 太郎が学生です。

(5) 太郎が日本語を知っている。

菊池 (1997:101-107)は、《中立叙述》の「が」の文は〈出来事〉性の述語の場合がもっとも普通であると指摘している。急に何かが起こった／起ころうとしているという場合で、「A が B」という全体をまるごと、いわば新しいこととして提示し、起ったことをすぐその場で述べる文である。

また、彼は、久野の《総記》を《解答提示》の「が」と呼び直している。例えば、「誰が来た？」「山田さんが来た。」は「x（誰か）が来た」という前提があり、その x を埋める機能を果たす文として使われる。質問文が発せられていない場合でも、この種の「が」は使われうる。つまり、まず話し手と聞き手の間で状況〈枠〉ができて、その〈枠〉もとで〈関心の対象〉と x があり、「x が〈関心の対象〉」の x を埋めるのが《解答提示》の「が」なのである。例えば、写真を見ながら、「この人が一番若いね。」などという場合であり、このことからも状態性述語の「が」は容易に《解答提示》と解釈しうる。

菊池はさらに、「X は Y が Z」のような構文について、「Y が Z」の述語が状態性を有する場合でも《中立叙述》として解釈することができると指摘している。《中立叙述》「が」は通常、「山田さんが入院したよ」のように起こったこと《出来事》をまるごと述べる現象文に現れる。しかし、「X は Y が Z」のような文では、「X は」という〈枠〉があれば、「Y が Z」が《出来事》の場合はもちろんのこと、《状態》の場合においてもまるごとの叙述が成り立つ。

例えば、「象は鼻が長い」構文は、象はどんな動物かという〈枠〉の下で述べた「鼻が長い」の《中立叙述》と解釈できる。本稿でも、「象は鼻が長い」構文の「鼻が長い」は、《中

立叙述》として扱いたい。

「象は鼻が長い」の「A は B が C」において、尾上(2004:16-17)は、A と B の間に「A の B」と言えるような関係が必ず成り立ち、その［A－B］関係とは、［全体—部分］を典型として、［個体—能力］、［個体—関係項］などにまで広がると指摘している。

しかし、「看護師の洋子」や「着物を着た時の母」のような〈A である B〉、〈時間領域 A における B の指示対象の断片の固定〉という意味関係を持つ〈A の B〉については、「A は B が C」文が、「象は鼻が長い」構文と意味的に異なっている。（西川(2013)を参照したい。）

(6) 看護師は洋子が親切だ。

(7) 着物を着た時は女性が素敵だ。

例(6)は「看護師」の指示対象に「洋子が親切だ」で表される属性を帰すという「象は鼻が長い」として読むことは困難である。例(7)も同様であると考えられる。

３.「象は鼻が長い」構文とインドネシア語の対応文

崎山(1991:278)は日本語とインドネシア語との対照研究において、部分・属性を表す「は…が」構文について、このような日本語の文と並行的なインドネシア語の文として、次の例を挙げている。

(8) *Anjing itu // ekor-**nya** / PENDEK.* [1)]

dog that tail -NYA short

「そのイヌは尻尾が短い。」

しかし、彼はこの構文について何の説明も加えていない。本稿ではこのような文を《有題文》と呼ぶことにする。例(8) は、次の(9)の《無題文》から派生された文であると考えられる。

(9) *Ekor anjing itu / PENDEK.* 《無題文》

tail dog that short

「その犬の尻尾が短い。」

《無題文》 (9) "*Ekor anjing itu / PENDEK.*" の所有者"*anjing itu*"「その犬」が、文頭に転位されることによって、文(8)のようになり、"*anjing itu*"「その犬」の元々の位置に立つ ekor「尻尾」に接尾辞"***-nya***"が付加される。

しかし、これは地方語・民族語の影響を受けた構文であるという考えもある。つまり、日本語の「象は鼻が長い」構文と対応する文は、次の (10)よりも、(11) あるいは (12)の文

であると考えることも可能である。

(10) *Gajah // belalai-**nya** / PANJANG.*

elephant trunk –NYA long

「象は鼻が長い。」

(11) *Gajah / BER-BELALAI PANJANG.*

elephant BER- trunk long

「象は長い鼻をしている。」

(12) *Belalai gajah / PANJANG.*

trunk elephant long

「象の鼻が長い。」

そこで、例(10)が民族語から影響を受けた構文であるかどうかを調べるために、まずインドネシア語の接尾辞"***-nya***"について考察したい。

3．1． 接尾辞"-nya"について

接尾辞"***-nya***"の用法に関して、Badudu (1993:109-114) は次のように分類している。[2)]

① 第三人称単数所有代名詞を表す

(13) *Midori me-nyobek buku catatan-**nya** lalu mem-buat peta jalan menuju rumah-**nya** dengan rinci.* (p.122)

Midori meN- tear book note -NYA then meN-make map road toward house -NYA by detail

「緑はノートのページを破って家までの道筋をくわしく地図に描いてくれた。」(p.135)

② 名詞化を表す

(14) *Dari terang-**nya** sinar bulan aku ϕ -perkirakan waktu sudah pukul dua atau tiga.* (p.249)

from bright -NYA light moon 1SG ϕ - predict time already o'clock two or three

「月の光の具合からするとたぶん二時か三時だろうと僕は見当をつけた。」(p.268)

③ Agent voice の第三人称単数代名詞の直接目的語を表す (meN-動詞-**nya**)

(15) *Langit begitu tinggi sampai-sampai mata terasa sakit bila terus me-mandang-**nya**.* (p.3)

sky so high to such an extent that eye feel hurt if keep meN- view -NYA

「空は高く、じっと見ていると目が痛くなるほどだった。」(p.9)

④ 第三人称単数代名詞の間接目的語を表す

(16) *Tetapi, sekali-kali aku tak akan mem-buka hati untuk-**nya**, ...* (p.60)

but not at all 1SG NEG will meN- open heart for -NYA

「それでも僕は彼には一度も心を許したことはなかったし、… (p.69)

⑤ Patient voice の第三人称単数代名詞の動作主を表す (di-動詞-**nya**)

(17) *Ia ber-maksud me-ngatakan sesuatu tetapi di-batalkan-**nya**, ...* (p.133)

3SG BER-intend meN- say something but DI- cancel -NYA

「彼女は何かを言いかけたが思いなおしてやめ、…」 (p.145)

⑥ 定詞を標示する

(18) *Tetapi urutan-**nya** kebalikan dari upacara pagi.* (21)

but order -NYA reverse from ceremony morning

(国旗掲揚・降下の儀式の話)「ただし順序は朝とはまったく逆になる。」(p.29)

⑦ 副詞を表す

(19) *... seperti-**nya** sinar mentari belum men-capai sekeliling mereka, ...* (p.31)

like -NYA ray sun not yet meN-reach around 3PL

「…彼女たちのまわりにだけは夏の光もまだ届いていないように思えるのだが、…」 (p.39)

⑧ 照応を表す (Badudu はオランダ語の verwijzing を使用している)

(20) *Tapi, yang di-sebut penyembuhan itu konkrit-**nya** seperti apa?* (p.182)

but LINK DI-call treatment that concrete-NYA like what

「その治療というのは具体的にはどういうことなんでしょう？」(p.198)

⑨ 接頭辞 se-と共に最上限を表す

(21) *Aku segera kembali ke kamar dan minum air garam se-banyak-banyak-**nya** ...* (p.60)

1SG soon back to room and drink water salt se- much RED –NYA

「もちろん部屋に帰って塩水がぶがぶ飲んださ」(p.71)

⑩ 第二人称単数所有代名詞 "*anda/-mu*"の代わりに使う (口語で「あなたの～」直接言うのを避けるため)

(22) Lahir-***nya*** bulan apa? (p.81)

birth –NYA month what

「何月生まれか、…」(p.90)

そして、Badudu は、地方語・民族語の影響を受けた"***-nya***"として以下の例を挙げている。

(23) *Rumah-**nya** Ali / BARU.*

house –NYA Ali new

「アリさんの家は新しい。」

"*Rumah-**nya** Ali*"の構造は、ジャワ語"***e***" ("*omah **e** bapak*" father's house)、ゴロンタロ語"***li***" ("*bele **li** papa*" father's house)、マカッサル語"***na***" ("*balla **na** ua*" father's house)の構造と似通っている。所有関係を表すため、所有物と所有者の間にリンカーのように使う。所有者は人称代名詞でない場合に用いられる。標準インドネシア語の "***–nya***" にはそのような用法は存在しない。

上記の考察から、「象は鼻が長い」構文に対応すると考えられる例(10) "*Gajah // belalai-**nya** / PANJANG.*"構文は、地方語の影響によるものではないということが分かる。地方語の影響があると考えられる文は、例えば、例(12)の所有物と所有者の間に接尾辞"***-nya***" が付加された、"*Belalai-**nya** gajah / PANJANG.*" Elephant's trunk is long という文である。例(10)"*Gajah // belalai-**nya** / PANJANG.*"構文の"***-nya***"は、⑧の《照応を表す》用法である。次の節ではこの文の構造について見てみたい。

３．２．インドネシア語の《有題文》について

インドネシア語は、歴史的にはマレー語といわれていた言語である。インドネシアという国は多言語多民族の国だが、マレー語が他の民族語よりも優先されたのは、歴史の中でマラッカの貿易センターでは、マレー語がコミュニケーションの最も一般的な手段であったことが主な要因であると考えられる。

Van Ophuijsen は、他の民族語の影響を見つけ出しながら、純粋なマレー語を研究してきた。彼はそのマレー語に関する文法書の中でまず次の二つの文を挙げている。

(24) *Anak saudagar itu / SAKIT.*

child merchant that ill

「その商人の子供は病気だ。」

(25) *SAKIT / anak saudagar itu.*

ill child merchant that

「その商人の子供は病気だ。」

一般のマレー語の話者は例(25)をよく使うと言われている。(24)では、"*anak*"「子供」が談話の観点から優先されており、(25)で優先されているのは、"*sakit*"「病気」である。一方、"*saudagar itu*"「その商人」が優先されて、文頭に立つ場合は、他の商人ではなく、「そ

の商人」という意味を表す。(26) はその例である。

(26) *Saudagar itu // anak-**nya** / SAKIT.*

merchant that child -NYA ill

「その商人は子供が病気だ。」

「その商人」は、「子供」と所有関係を持っており、文頭に転位された場合、代わりの語が必要である。「その商人」が文頭に立つと、元々「商人」が位置していたところに "***–nya***" が入る。例（26）は英語の"*(As for) that merchant, his child is ill.*" と対応すると考えられる (van Ophuijsen, 1983:89) [3]。

マレー語の発話者にとっては(26)より以下の(27)の方が、一般的であると見なされている。

(27) *Saudagar itu // SAKIT / anak-**nya**.*

merchant that ill child-NYA

「その商人は子供が病気だ。」

Labrousse (1978:163)は文頭に配置される要素を主題と呼び、以下の例を挙げている。[4]

主題（常に定詞である）// 主部＋***-nya*** / 述部

(28) *Orang itu // mata-**nya** / BIRU.* (= *Mata orang itu / BIRU.*)

person that eye -NYA blue eye person that blue

「その人は目が青い。」 ＝「その人の目が青い。」

さらに Labrousse は（28）の代替構文は(29)のようになると述べている。つまり、主部と述部は倒置することができる。[5]

(29) *Orang itu // BESAR SEKALI / rumah-**nya**.*

person that big very house-NYA

「その人は家がとても大きい。」

Li & Thompson (1976:470)によれば、インドネシア語は、主語卓越型であるが、《有題文》も存在する。しかし、主題の位置に立つことができる基準形文(canonical sentence)の要素は制約されている。つまり、表層の主部または主部の所有者が主題になることが可能である。

例(30)は、「主部—述部」の文である。そして(31)は、主部が主題になる文であり、(32)は主部の所有者が主題になる文である。

(30) *Ibu anak itu mem-beli sepatu.*

mother child that meN- buy shoes

"That child's mother bought shoes."

(31) *Ibu anak itu, **dia** mem-beli sepatu.*

mother child that she meN- buy shoes

"That child's mother, she bought shoes."

(32) *Anak itu, ibu-**nya** mem-beli sepatu.*
child that, mother-NYA meN-buy shoes
"That child, his mother bought shoes."

このような文頭転位について、左方転位論の観点から、Lambrecht (2001:1057-1060)は、(31)及び(32)の文は区別する必要があり、(31)のような文は左方転位文であり、(32)の文は主題化文であると指摘している。

彼は左方転位について四つの基準を挙げている(Lambrecht, 2001:1050)。[6)]

i. 節外の構成素位置［が左方転位要素によって占められる］
ii. その代わりに節の中に［pronominal が起こる］位置がある
iii. ［左方転位要素と pronominal が］同じインデックスを持つ
iv. 特別なプロソディー—［具体的には、左方転位要素は常にある程度音律的に卓立し、典型的にはポースが後に続く］

例(31)は、四つの左方転位文の基準を満たしている。基準形文の主語 "*ibu anak itu*" that child's mother は左方転位要素になり、その代わりに人称代名詞 "***dia***" 3SG は、節の主部を占め、左方転位要素を象徴する機能を持っている。

例(32)の場合では、文頭に転位された要素 "*anak itu*" that child と、節の主部 "*ibu*" mother は、所有関係にあり、節の中に可能な代替の位置が存在しないので、転位された要素を象徴する人称代名詞はない。標準(ii)と(iii)を満たさないと考えられる。

例(32)のような文について、Lambrecht は、転位された要素を *unlinked topics* と呼ぶ。節の中の所有代名詞はトピックへの照応リンクとして機能している。*Unlinked topics* 構文はトピックシフトとして機能し特に口語談話で使用されている。

Lambrecht は上記のように、インドネシア語は主語卓越型言語でありながら、主部の所有者のみ主題の位置に立つことができるという《有題文》も持っているということを明らかにした。「象は鼻が長い」文と対応する "*Gajah // belalai-**nya** / PANJANG.*" はその例である。

4. 結論と今後の展望

インドネシア語には、《有題文》を《無題文》から区別するための明確な標示はないが、主題になる要素には制約がある。その要素は、節の主部の所有者であることで、日本語の「象は鼻が長い」構文と並行的な表現であると考えられる。

日本語の「A は B が C」の「象は鼻が長い」構文との相違点に関しては、日本語の場合は、「B」は「～の」形式を伴わないが、インドネシア語は、主題への照応リンクの標示が

必要であるということである。つまり、インドネシア語は、「B」の位置に"***-nya***"が付いている。

さらに、「A」の位置に、現在の会話の登場人物・事物リストに登録済みのものを指す名詞句であるということについて、日本語は多くの場合は、定詞の標示は利用しないが、インドネシア語の場合は必要である。例えば、以下は話題が用意された料理の中のスープについてという状況であり、スープは話し手と聞き手の間に既に登録済みのものである。インドネシア語は、定詞の標示"***-nya***"を利用するが、日本語の場合は何も標示しないのが普通であると考えられる。

(33) *Sup-**nya** // rasa-**nya** / terlalu asin.*

soup –NYA taste –NYA too salty

「スープは（味が）辛すぎる。」

インドネシア語では「A」の要素に定詞の標示を付いていない場合は、総称名詞として見なされている。

以上「象は鼻が長い」構文におけるインドネシア語の《有題文》との対応関係を明らかにした。今後の課題として、「A は B が C」において、「B が」が《解答提示》を表す構文とインドネシア語との対応関係を探りたいと思う。

省略記号

meN＋動詞　インドネシア語の agent voice 動詞形

DI＋動詞　インドネシア語の patient voice 動詞形（動作主は第三人称である）

φ＋動詞　インドネシア語の patient voice 動詞形（動作主は第一人称・第二人称である）

BER＋動詞・名詞　自動詞を表す、名詞の場合は「～を持っている」を意味する

LINK　名詞とその付加語を結ぶためのリンカー"*yang*"、文脈によって先行詞は省略可能

RED　reduplication （重複形）

注

1) //、/、太文字、小型英大文字は筆者がつけたものである。// の前の要素は主題、/ は節の主部と述部を分けるため、小型英大文字は述部を標示する。

2) 例文は、筆者が集めて用法によって分類した村上春樹の小説から引用されたものである。

3) Van Ophuijsen, Ch. A. (1910) *Maleische Spraakkunst*. S. C. Van Doesburgh, Leiden. (T. W. Kamil 訳(1983) *Tata Bahasa Melayu*. Penerbit Djambatan, Jakarta.

4) "Le "thème" est posé en tête de phrase, mais le rapport d'appartenance ou de possession dans lequel il se trouve avec le sujet est marqué par le suffixe **–nya**. Il est à noter que le "thème" est toujours

défini. Cette construction est marquée également, à l'oral, par une pause entre le thème et le sujet."

5) "Comme variente de cette construction, l'ordre sujet / prédicat (verbe d'état) peut être inversé, selon les règles déjà étudiées."

6) 山泉(2013:423)により訳されたもので、[ ] は山泉が補ったものである。
"The above definition involves four criteria: (i) extra-clausal position of a constituent, (ii) possible alternative intra-clausal position, (iii) pronominal coindexation, (iv) special prosody." (Lambrecht, 2001:1050).

参考資料

菊池康人(1997)「「が」の用法の概観」川端善明・仁田義雄編『日本語文法—体系と方法』ひつじ書房.

久野暲(1973)『日本文法研究』大修館書店.

西川賢哉(2013)「二重コピュラ文としての「A は B が C（だ)」構文「象は鼻が長い」構文を中心に」西山佑司編『名詞句の世界—その意味と解釈の神秘に迫る』ひつじ研究叢書〈言語編〉第 112 巻 p.167-211. ひつじ書房.

尾上圭介(2004)「主語と述語をめぐる文法」尾上圭介編『朝倉日本語講座 6 文法 II』p.1-57. 朝倉書店.

山泉実(2013)「左方転位構文と名詞句の文中での意味的・情報構造的機能」西山佑司編『名詞句の世界—その意味と解釈の神秘に迫る』ひつじ研究叢書(言語編)第 112 巻 p.431-457. ひつじ書房.

Badudu, J. S. 1993. *Pelik-Pelik Bahasa Indonesia*. Penerbit Pustaka Prima. Bandung.

Labrousse, Pierre. 1978. *Methode d'Indonesien*. Paris: L'Asiathèque

Lambrecht, Knud. (2001) "Dislocation". In: Martin Haspelmath, Ekkehard König, Wulf Oesterreicher, and Wolfgang Raible. (ed.) *Language Typology and Language Universals: An International Handbook Vol. II*. Berlin: Walter de Gruyter. 1050-1078.

Li, Charles & Thompson, Sandra A. (1976) "Subject and topic: A new typology of language." In: Li, Charles (ed.), *Subject and topic*. New York: Academic Press, 457-490.

van Ophuijsen, Ch. A. (1910) *Maleische Spraakkunst*. S. C. Van Doesburgh, Leiden. T. W. Kamil 訳 (1983) *Tata Bahasa Melayu*. Penerbit Djambatan, Jakarta.

引用作品

村上春樹（2004)『ノルウェイの森（上)』講談社.

Murakami, Haruki (2005) *Norwegian Wood*. Kepustakaan Populer Gramedia.